

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午後】
部会名	小学校 図画工作部会

テーマ 『表現する喜びを味わう図画工作の授業を目指して』

提案概要

題材名「粘土絵～土から絵具をつくってみよう」

学年 5年生

●実践の概要

年度当初テーマに沿って描いたり造ったりする際に「どのように表現したらいいのか」イメージがもてないという児童がいた。その根底には自分の表現に対する自信がないことや絵を表す際もそっくり描かなくてはならないという先入観があることに気付いた。そこで、そういった児童も表現する喜びを味わえることのできる題材の設定を考えた。1年間を通して、様々な用具や材料と出合わせ、作品を作る楽しさを児童が実感し、教師も楽しめる授業を考えてきた。

【指導方法の工夫】

- ・授業の導入では、材料や用具との出会いを大切に、年間を通して様々な材料や用具と出合わせ、児童が表現したいことの幅を広げられるようにした。
- ・各単元計画の中に児童が自分の表現したいことを見つけたり、作りながら想像をふくらませたりすることができるように、試す（材料の特性を知る・用具に慣れる）時間を十分に確保した。
- ・作品の製作の途中にお互いの作品を見合い、自分の作品に生かせる場所を探す場を設定した。

【評価の工夫】

- ・作品を完成させるまでの過程（製作途中の児童の動きやつぶやき、児童への聞き取り、子どもたち同士の関わり合いなど）を記録し、評価に生かした。

●成果

- ・自分の表現したいことを試す時間を十分に確保することで、自分の表現に対して自信をもてるようになった。
- ・グループ（アイランド型）にすることによって他の児童の作品づくりに影響しあっていた。
- ・年間計画の中で、単元のつながりを考えて活動をする事ができた。
- ・試しながら描くという進め方や抽象的な作品は、絵を描くことに抵抗を感じている子や苦手意識をもっている子にとってハードルが高くなく、自信をもって表現していた。

●課題

- ・評価は1時間ごとの作品の変容や取り組み方を教師が見回りながら記録していったが、見取ることができないときがあった。
- ・それぞれの児童たちの作品への思いなどは、教師が一人一人と対話形式で行った。クラス担任だからできる方法であるが、時間がかかってしまうことが課題である。

研究協議概要

○作品の評価について

- ・専科では、図工の評価が課題である。時間内に作品を仕上げる事が難しい児童がいる中で、一人一人に聞き取りをして評価をすることは難しい。
- ・ワークシートを使っている。児童の国語力が評価に関わってしまうことが課題である。
- ・対話を通して、子どもの思いを受け止めながら評価している。児童が気軽に思いを表現できるので良い方法だと思う。
- ・授業の目標が、技術を身に着けることであれば、作品を回収して視点を絞って評価することができる。
- ・ワークシートに書かずにデジカメを使って記録する方法をとっている。児童自身ががんばったところを指で差している姿を写真に撮り、事後の評価につなげていく。
- ・友達同士で頑張った点など、気付きを交換する。
- ・附属中学校の実践が参考になる。振りかえりノートを作り、1時間ごとに記入していき、児童の思いをくみ取っていく。ポートフォリオに近いものである。

- ・学年で作品展示をして、学年の担任同士で見ても面的に評価する。作品を見ながら評価の仕方をベテラン教諭から教えてもらう。児童が苦手と書いていてもその場でほめられ、成果が目に見えるから、自尊心を高めるために図画工作は大切な教科である。
- ・苦手意識をもった児童が、「うれしい！楽しい！」という気持ちになるためには、安心して活動できる環境が必要である。この児童の変化が評価につながってくるのではないか。

○児童の変容と見取り

- ・変容を毎時間見なくてはいけないということではない。思う存分、活動を満喫することが目的になる場合もある。
- ・ワークシートを細分化してプロセス等を見取れるようにした方がよい。途中の作品を写真で残すこともよい。
- ・子どもが悩みをワークシートに書き、次の時間までに担任が赤ペンを入れるという実践もあった。
- ・作品にタイトルをつけることで、物語が生まれ、子どもたちが思いを語ることを見取り評価につなげる。
- ・作品の完成は子どもが決めるべきで、教師が終わりを決めるべきではない。
- ・子どもが互いの作品を見合うことができる環境を整えることが大切である。
- ・発想を引き出すために、友達や教師の作品を見せ、まねることから発想が広がることもある。そして、子どもの表現したことをほめていくように心がけていきたい。
- ・写真で行事の振り返り、技能を教えるから描かせるなどイメージを膨らませる手立てが必要である。
- ・日頃から、絵本や美術作品を見せるなど、意図的に発想を広げる材料に触れさせておくことが大切である。
- ・意欲を引き出すために、教材・用具をそろえることは大切である。また、教師の教材研究も重要である。
- ・発想と構想力は違うのではないかと考えた。
- ・6年間でつきたい力を見通して指導を積み重ねていくことが大切である。1年生でやったことを、2年生で使っていくなど、系統的に学べるようにしていく必要がある。
- ・活動の見通しをもたせることで、ゴールに向かう意欲が湧き、完成した時の喜びにつながると思う。

まとめ概要

図工に対し、苦手意識をもつ子どもが高学年になると多くなっていく。子どもは、うまく描かなくてはいけないとか、他の作品と自分の作品を比べてうまく描けていないというような思いをもっているようである。教科の目標に立ち返り、「感性を働かせる」、「つくりだす喜びを味わうようにする」という視点で、指導をしていく必要がある。子ども自身が、体全体の感覚を働かせ、作品をつくりだすよさや面白さを感じ取り、様々な材料と出会い、自分のイメージをもっていけるような図工の授業を組み立ててほしい。そして、でき上がった作品だけでなく、活動の過程で見られる子どもたちの思いや変化をくみ取り評価につなげるべきである。

協議の中で「変容を見る」「評価の規準」「楽しむ活動」の言葉があった。子どもの変容を見る際、具体的に何の変容を見るのか、統一する評価規準を具体的にどう設定するのか、そして、楽しむだけの活動だけでいいのか。これらの言葉に共通するのが「ねらい」である。どの授業においてもねらいを明確にすることが共通事項であり、ねらいの明確化は評価規準の明確化でもある。それを子どもと教師が共有していくことが大切である。具体的なねらいは、そこに子どもの何を見取ればいいのか、どのような変容を見ればいいのかをはっきりと示されるはずである。

今回の「子どもたちに自信をつけさせたい」という思いからの提案は、今までにはない切り込み方で、実際には多くの教員に共通する悩みである。思ったことをそのまま表現する低学年と、思慮深くなる高学年ではそれぞれ違う課題が生まれてくる。技術については、学年ごとの積み重ねが大切で、様々な経験を積むことで、発想・構想力が広がっていく。試しをする時間をたっぷり取り、失敗も経験しながら、子ども自身が何を作りたいのか、イメージを膨らませていくことが大切である。

子どもが自分の作品に愛着をもっているかが評価の一助となるのではないか。たとうまくいかない部分があっても、手立てを講じ、次につながる成功体験をさせることで、自己肯定感をもてるようになる。だからこそ、子ども達に対し、授業の中で励みとなる声かけをより多くしていきたいものである。指導者として、どんな力を身につけさせたいかを考えておくことは絶対条件となるであろう。

子どもに、イメージを広げる手立て講じ、子どもの表現を認め、話をよく聞き、アドバイスをすること、また、友達と交流できる場所や空間、材料、活動の見通しをもたせることも必要である。授業の終わりに「もう、終わり？またやりたい!!」という言葉が子どもたちから出てくるような授業を目指していくことが大切である。